

2019 年を振り返って 掲載記事 トピックス

本年は8回の更新に合わせ、更新の折々 季節の便りととともに、頭にあることを書き連ねた From Kobe 。この一年 書き綴ってきた文章を眺め、一年を振り返ってみると同じことを繰り返し、言い続けてきたようだ。地球温暖化が抜き差しならぬ時代 その自然の災害の猛威が直接我が身にも……………。

平成から令和に変わり、大きなパラダイムシフトが世界で起こっている。

そんな激動の中で 身勝手な政治に振り回され続ける定見なき日本 日本はどこへ行くのか……

未だに方向がみえぬ理由のわからぬ社会情勢。先が見えぬ日本 そんな状況が今も続く一年だったと。

12月には Cop25 あのスウェーデンの16歳の若者が 世界を相手にあれだけ地球危機を訴えている。

それも世界の首脳たちを前に堂々と。そんな問いかけにどうこたえればよいのか…

新聞の論調もここに来て 急激に変わってきた。

迷走する日本を感じる中で、日本社会の読解力低下を示す国連の調査結果の記事が出た。

科学技術立国・ものづくり世界一が もう誰の目にも由来で見え出した今

「自立して物事を考え理解し判断する力=読解力」が ここ10年で大きく下落し、トップクラスから遠く離されていると。3月 小林喜光氏の「平成の30年間、日本は敗北の時代だった 敗北日本、生き残れるか」の記事にビックリして以来の強烈な日本へのパンチである。でも 馬耳東風の日本 これで良いのか……………

日本の今を振り返る一助になれば…と。ふれた年寄り風来坊のたわごとです。

下記の文は本年はじめの from Kobe に書き記した言葉である。

◆ 2019年 年のはじめに 心も新たに 年のはじめの思い

日本人の心の故郷 「縄文」・そして太古から国土・海を豊かにしてきた「鉄」に思いをはせて

私がよく口にする「縄文帰り」・「日本人の心」、そして この変革の時代に新しい顔を見せる「鉄」

生命をつかさどる元素文明を支える元素として「鉄」がなければ人類は生きてゆけない
溶鉄の輝き「閃光」と鉄の黒光「肌光」その輝きの中に燦然と輝く「鉄」と人類の知恵の数々
人類が激変する地球を生き抜いてきた唯一の道-知恵が「他人を思いやる心」
かつて日本には「1万年の長きにわたって平和な社会を継続した形成してきた時代があった」
日本人の心のふるさとといわれる「縄文」 そのエンジンは「縄文の心-他人を思いやる心」だった
「鉄」と「縄文の心」 激変 の今 時代を生き抜く唯一のエンジンである
現代社会においてはしばしば「なまっちょろい」と呼ばれ、切り捨てられてきた「心」
でも 一旦危機災害に直面した時には 誰しもがその力強さに心打たれる「心」
「鉄」も今 激変する時代の中で、新しい姿を見せ、新しい指針を示し始めた。
「鉄は国家なり」の「鉄」から「豊かな海を育てる豊し鉄」・「地球温暖化を軽減するかもしれない鉄」へ



望むと望まざるにかかわらず、躍動の時代から 成熟社会-人口減少の「激変の時代」へ
人類が幾たびも経験してきた絶滅の厳しい淵に立っている。

人類が困難を生き抜いてきた力それは「仲間を大切に思う心の進化」と「集団の協力」
約1万年の長きにわたって継続した日本の縄文はその実証例
幼くして歩けぬ障害をもった少女が、年老いるまで
集落の人たちに見守られ、生活を共にしてきた例が見つかった。
「心優しき縄文人」「日本人の心の故郷」と言われる所以である。

また、「地球は鉄の惑星 もし 鉄が地球になかば、地球の生命体も生命を維持できず、存在しえない。
動物の血液中の鉄・植物の光合成にも鉄が関与しりせている。
山海の動植物の生態系も また「鉄」により、維持されている。

縄文の森を含め、太古の昔から、日本列島の沿岸には豊かな山・森があり、
最近「沿岸の山や森が豊かな海を育てる」「山は海の恋人」耳にするようになったが、
山に含まれている鉄分が森の植物によって、水に溶けこむ鉄となって、川を下り、豊かな海を育てる。
魚貝や海産物の資源の形成・生態系の循環には豊かな山や森の存在が欠かせぬことが明らかになっている。

ここでも「他人を思う心」・「集団の協力」をエンジンにした地方自立循環型経済創生・豊かな海や森の
資源開発が進められている。

鉄の惑星 激変する危機を生き抜くエンジンは「他人を思いやる心」
幸福への岐路にある今 スピード・情報過多の情報社会の流されず、自らをじっくり考えよう。
そこに地球に生きる仲間みんなの共存再生の道がある。
「心優しき縄文人」「分かち合い」の多様性 そして 沖縄には「命こそ宝」の言葉もある。

終活が頭にちらつく我々だからこそその役割もあると信じて今を前向いて
わが道をゆく God Be With You!!

また、本年こそ日本の縄文に 世界遺産の道が開かれますよう 期待を込めて

2019.1.1. Mutsu Nakanishi

一年経っても世界情勢 社会に大きな変化が見られず、特に日本ではひたすら高度成長期の成功体験にとらわれ、高度情報化のうねりの中 競争と効率を追い求める同一均質化の社会を未だに追い求め、多様・多質の柔軟な社会に鍛冶が切れないでいる。
 景気は一向に良ならず、格差はますます増大する中、高齢化は急速に進み、不安感が漂う社会。そんな中で 美辞麗句の薄っぺらな掛け声に酔いしれ、自分さえ良ければ・・・と。
 掛け声とは裏腹の薄っぺらな高度情報社会に はっと気がつく。
 日本はこれからどこへゆくのか・・・ そんな思いを書き綴った本年の from Kobe 雑文。

- 1月 [心の故郷「縄文」と「鉄」に思いを馳せて](#)
- 3月 経済同友会代表幹事 小林喜光氏 <インタビュー>記事 転記ご紹介2019.1.30 朝日新聞朝刊「平成の30年間、日本は敗北の時代だった 敗北日本、生き残れるか」
- 4月 兵制からたらしい年号「令和」が発表された1日 [高度成長を支えた鉄鋼住金の名が消えた「平成」の総括から「令和」の新時代へ](#)
- 7月 経験したことのない初夏 目まぐるしく変わる気象変化に負けぬよう
- 8月 [2019ひまわり夏 神戸便り](#) 雑感 異常気象をひしひしと感じる今年の夏 参議院選「嘲笑する政治」この夏 一番 私に響いた言葉 朝日新聞 2019.7.7.
- 10月 [朝日新聞 2019. 9.27朝刊 天声人語・オピニオン&フォーラムより](#)
 大きなパラダイムシフトが進行する国際情勢の中で、国民に何も説明せず、みくだす横暴な仲間政治 理念も目標も失いまだに高度成長期の流れにしがみつくと日本 これではよいのだろうか…
 なぜ、日本では新しい雇用・ビジネスを生みだす先進事業・企業が生まれない。
- 11月 この秋に思うこと 色々 この秋 何度か耳にした情報
 効率化・選択と集中 行き過ぎた資本主義は人々を幸福にしない
 GAFa グローバルな巨体企業の存在は富を集中し、富の分配がなされない」
 多重・多様化をキーワードに《柔軟な社会作りへ舵を切る》パラダイムシフトの波がおこりはじめた
- 12月 [師走の今 本年を振り返って 心に響いた言葉](#)



一握りの政治主導に飽き飽きする中で、ここへ来て 新聞の論調も 急激に変わってきた。
 一度耳を傾け、日本の今を振り返る一助になれば…と。
 また、日本の縄文をもっと知ってほしいと言いつけてきましたが、やっとまたユネスコ世界遺産登録の土俵に。
 最近 縄文についての記事や解説が新しい視点で語られるようになったのもうれしい。

いろんなことがあった一年 あれもこれもとあたまを駆け巡り、令和元年が暮れてゆく・・・・・・・・・・
 早く若ものの時代へ舵を切れ!!との思いです
 来年こそ 令和の新しい時代と 誰もが実感できる明るく平和な時代になってほしいと。

2019.12.31. 2019年 四季折々 和鉄の道を振り返って

2019 本年を振り返って 心に響いた言葉 From Kobe 12月より

2019.12.8. Mutsu Nakanishi

師走になって、ことし一年を振り返って その時折々 書き綴った季節の便りの中でお送りした言葉。ほんとうに毎回 同じ言葉ばかりでした。

インターネットやニュースでは、今が一番と社会への満足を謳歌する言葉・番組があらわれるが、何とはなしに息苦しく閉塞・不安が漂う社会。なにか自分には合わない。ついていけないなあ・・・と。後期高齢になって非生産的な日々を送る今 取り残されているとの不安感が頭をよぎる。「でも ほんまにええのか・・・ 現実はどうだろう・・・」

そんな師走の中で発表された OECD が3年ごとに行う世界各国の15歳を対象とした学力総合調査。(読解力・数学的リテラシー・科学的リテラシーの3分野)で、高い学力を維持しているものの、日本の読解力が大幅に低下したと伝えている。日本の現在の社会に与える強烈なアッパーカットである。教育の問題 子供の問題と過少評価する向きもあろうが、この問題今の日本の現実 社会の問題。日本が一人 国際社会から取り残されてゆく深刻な姿が映されている。でも 日本社会はそれに気が付かない。

15歳 ネット情報精査が弱点

OECD 国際調査

Programme for International Student Assessment of OECD

年	読解力 (順位)	数学的リテラシー (順位)	科学的リテラシー (順位)
2006	32	41	57
2009	41	57	63
2012	45	72	77
2018	72	77	77

日本、「読解力」続落15位

15歳 ネット情報精査が弱点

日本のデジタル対応課題 押点

2019年(令和元年)
12月4日
水曜日

朝日新聞

朝日新聞大阪本社

15歳 ネット情報精査が弱点

日本、「読解力」続落15位

天声人語

南米油のイースター島は巨大なモアイ像で知られる。住民は像の運搬に木材を使ったはずだが、森はその後すっかり消失した。ネズミによる食害か、それとも住民が乱伐したせいなのか▼世界の15歳が挑んだ国際調査PISAの出題例である。鳥の森林消失の理由を論じた資料を並べ、どの説が正しいか論拠を書かせる。筆者も解いてみたが、出題意図がつかみにくい。探点してさらに驚いた。食害か乱伐かのどちらかだろうと思いきや、「両説とも十分、さらなる研究が待たれる」も正解とされた▼調査に参加した日本の高校生たちは、さぞ冷や汗を流したところだろう。筆者の世代は教室で出会うことになった設問形式である。しかも紙と鉛筆ではなく、コンピューター画面上で解かされたら聞き、同情を覚える▼「学校では優秀生だったのに就職後はさえない人がいる。それはなぜなのか」。数年前、取材したPISAの担当者から言われた。「細かな知識はネットですぐ得られる。知識よりも、知恵を出して事態を突破する力が求められています」。熱のこもった口調だった▼2018年調査で日本は大きく順位を下げ、激震が走った。今回も「読解力」が低下した。中国都市圏が好成绩なのはなぜか。日本のデジタル教育はなぜ遅れるのか。結果に振り回される必要はないが、今後はそんな究明が欠かせない▼自分が学生時代に受けた試験との「哲学」のあまりの違いに考え込む。学とは何なのか。根源的な問いを突きつけられた。

2019・12・4

2019.12.4. 朝日新聞が伝える OECD の 15 歳学力調査結果と天声人語の記事

◆拡大記事 URL: <https://www.infokkna.com/ironroad/2019htm/OECDasahikiji191204a.jpg>

無知盲目の仲間を募って 数の力でなんでも押し切る刹那の社会 美辞麗句を並べ 中身はそっちのけ
なんでもかんでも 自己責任に転じる。 自分の政策を「・・・ミックス」と自ら声高に言いまわるのは
自己陶醉そのもの。

セーフティネットがずたずたになった国土・地方は疲弊し、ますます格差が広がる刹那日本の情報社会
この秋 30歳40歳の働き盛りの給与水準は10年前の給与水準よりも10%以上低下しているとの
統計が発表されている。その上 消費税は10%に。 一方会社は好景気を謳歌し、高収益・内部留保
をため込んでいる。そして 人手不足が深刻だという。全く不思議な現実。
これは人為的な政策の代物の何物でもない。

片手間の非正規雇用対策ばかりでなく正規雇用の拡大 そして何よりも働く場・新しい雇用を生み出す産業創生
に注力せねば・・・。

でも 新産業創設の研究開発費の投入・分配の見識のなさは目に余る。
もう技術立国は影薄く、大企業は今の事業路線にしがみつき、次の事業がない。
これでは新しい雇用は生まれない。もう 大企業依存・イベント依存から脱却せねば…
湯水のごとく民衆の懐に手を入れて使う国債・消費増税頼みも限界に……………
昔はよかった…との言葉も聞かれるようになった今、もう 破綻寸前と映る
もっと 皆が明るい社会にならないものか…そんなことばかり言ってきた一年だったと映る。

そんな師走の中で発表されたOECDが3年ごとに行う世界各国の15歳を対象とした学力総合調査
(読解力・数学的リテラシー・科学的リテラシーの3分野)で、数学・科学の分野では高い学力を維持しているが
日本の読解力が大幅に低下したと伝えている。「リテラシー」とはなにか…また読解力の問題とは……………
インターネット等で調べると、原義では「読解記述力」を指し、転じて「適切に理解・解釈・分析し、改めて記述・表現する」という意味に使われるという。

要は社会全体の活力の源泉 知識は非常に高いレベルであるものの 知恵・判断・確かな行動アプローチが出来
ないといわれ、社会の活力が失われているとの警鐘。

常々 多くの人々が指摘する日本社会の課題と現状があからさまに国際的にも指摘された。
国際社会がし認める国力の先行きを示す重要な指標でと言える。
強がりはいやまい。 今日本の現実はこのようのだ…と。 そう思うと本当にいろいろなことが見えてくる。
この一年 日本で起こった数々の問題の根源にこの指摘が当てはまる。

◎ 読解力と「リテラシー (literacy)」とは、

読み書きができる能力や、その分野の応用、活用力、理解力を意味。

「リテラシー」は、単独でその言葉だけを使うことは少なく、「コンピューターリテラシー」や
「メディアリテラシー」「環境リテラシー」といった風に使うという。

◎OECD 調査 読解力の設問

解説を含め2019.12.4. 詳細が示されている東京新聞の記事を紹介する

「ラパヌイ島」と題する設問

ラパヌイ島(イースター島)で調査をしている教授はブログで、
モアイ像が作られた当時にはあった大木が現在は生えていないことに疑問を示す。
木の乱伐が原因とするジャレド・ダイヤモンド氏の著書「文明崩壊」の書評、
ネズミが種を食べたためとする科学者の反論を紹介する記事があわせて示される。
生徒たちはそれら三つの文章を読み、大木が消滅した理由を根拠を挙げて説明することを求められる。
自らの可能性を広げ、社会に参加するために文章を理解して熟考し、考えを表現する力。
それがOECDが提示する読解力だ。……………

三年ごとの調査結果は教育政策に大きな影響を及ぼしてきた。

ゆとり教育転換の一つの契機は、読解力などが低下傾向にあったことだ。

2007年に再開された全国学力テストの出題はPISAを強く意識したものとなっている。

202年度から本格実施される高校の新学習指導要領では国語を「論理国語」「文学国語」などに再編する。

文学が片隅に追いやられるのではないかと文学界などから懸念の声が上がっている。

調査では読書についても尋ねており、興味深い分析結果が出ている。

雑誌以外では「読む」グループの方が「読まない」グループよりも得点が高く、

最も得点差が大きいのは小説や物語などのフィクションだった。次いで新聞、漫画となっている。

「論理的」と仕分けされた文章だけが、読解力を育むとは限らないことを示唆しているのではないか。

読解力は、多様な養分を吸収してゆっくり育つ木のような力なのだろう。

読解力育成のため、社会や理科など国語以外の教科でも、文章のまとめりなどを意識した授業改革に取り組み

始めた学校もある。調査の順位のためというよりは、子どもたちの未来を広げるために、学校や社会が豊かな

養分を含んだ土壌でありたい。

インターネット記事検索でみつけた東京新聞 2019.12.4. 記事より 全文整理

これは今の学校のOX式詰め込みの受験教育の中では最初から設問に詰まって解けないわ……と。

でも 一部の私学では そんな読解力中心の国語授業が行われ、他の授業と連動されているとの話を聞いて、余裕があるなあ。。。と感心したこともある。

天声人語氏は「細かな知識はインターネットで得られるが、知識よりも知恵を出して、事態を突破する力が求められる」というOECD担当者の言葉を紹介している。日本に一番今かけている点との指摘。

知識がいやというほど積み込まれていく日本の今の画一的な教育への痛烈な一発である。

みんながみんな社会全体が同じ方向にむけた発展途上の高度成長と成熟した今の情報社会には当然違いがある。

今の時代 一部の人に情報が限らず 同じ情報を広くみんなが持っている。そこに 多層多重の芽があり、それを封じて 同一を強いられることに息苦しさをを感じるし、異を感じる時代なのである。で

も 日本では今 あまりにも「不思議やなあ」「おもしろいな」などの発想や知識から広がる「知恵」がない。

付和雷同 感激・感動ではなく盛り上げの言葉が空虚に響く。

知った知識を少し披露しただけで「それがどうしたの…… ああ めんどくさ」との言葉がすぐに。

知識から知恵・発想への転換が全く無視され、同一同調が一番される日本昨今の情報社会。

なにも子供たちの教育問題だけではない。今の日本の社会全体がそうになっているのだ。

とりわけ、日本を動かしてきた政治・大経営者たちの言動をみれば一目同然……

ほかにも この12月 心に響いた記事がいくつかありましたので、転記。

この秋 重多様な社会への脱皮について、それぞれの個性を意識する多様多重社会の醸成を考える本や新聞記事・番組に数多く出会うことがあり、自分にはできなかった反省も込めて。

特にあまりに個性豊かで 仲間・先生・学校での集団生活に溶け込めず、「好きなことを 好きに 好きな時に」と

その都度 自分の実学ノートに記してきた7年間の記録をひも解くNHKの番組NHK「ボクの実学ノート 7年間の小さな大冒険」で語られた 生物学者福岡伸一さん著「エリボシカミキリ」の中にある言葉

やこの秋読んだ「ソーシャル・マジョリティ研究 コミュニケーション学の共同創造」にも心に響きました。

また、本年は仲間がみんな後期高齢を迎え、老化と向き合う歳に。

老化と闘い、また先に逝ってしまった仲間もいる。この秋は仲間を思い浮かべながらの毎日散歩になったことも数多し。

でも まだまだ好奇心もあり、足も動く。家族仲間もいる。勝手気ままな風来坊 神戸の片隅で

皆に世話になりながら 勝手気ままにと。

本年どうもありがとうございました。 また来年。

From Kobe Mutsu Nakanishi

衰退の兆候

「競合する全勢力を抑え込み、すべてを自分と同じ鑄型に流し込むのに成功してしまうと、その国の向上は終わり衰退がはじまる」
 「抵抗を感る可能性ない人」は「理性」を必要としなくなり、その意思を押し通すようになる。
 「間違っていると告げてくれる人の話を聞けば、いらだってしまう」

桜を見る会 危うい選挙独裁

寄稿
齋藤純一



安倍晋三首相（前列中央）、昭恵夫人（河右から4人目）と記者団の「桜を見る会」の参加者＝4月13日、東京都新宿区

抵抗の可能性を排除 民主主義に傷

「競合する全勢力を抑え込み、すべてを自分と同じ鑄型に流し込むのに成功してしまうと、その国の向上は終わり衰退がはじまる」。19世紀英国の思想家、J・S・ミル「代議制統治論」の一語である。「抵抗を受ける耐性のない人」は、「理性」を必要としなくなり、代わりの人（「独裁」を押し通す）にされる。「間違っていると告げてくれる人の話を聞けば、いらだってしまう」。

「桜を見る会」をめぐるこの間の安倍政権の対処を告げると、「ミルのいう『衰退』の象徴は明らかであるように思ふ。」

「桜を見る会」やその「昨夜」に際しては、政権が中絶した行動に公選選挙法や政治資金規正法に反する疑いがあることは、すでに指摘されているとおりである。公選が実質的に「権威」の有権者対策に面しては、安倍政権の政治は、それにとどまらず、問題はそのもとにまで及ぶ。この政権は、これまで不都合な文書や記録、証拠、事実を隠蔽してきたが、今回もまた隠蔽の手法で責任の追及をかわそうとしている。それが強く露つたのは、民主主義を成り立たせるための制度である。

アカウンタビライティー（説明責任）は、政権を巡る「説明責任」に受ける可能性にさらされたものである。国会における議員の職務がその柱だが、説明責任

「桜を見る会」やその「昨夜」に際しては、政権が中絶した行動に公選選挙法や政治資金規正法に反する疑いがあることは、すでに指摘されているとおりである。公選が実質的に「権威」の有権者対策に面しては、安倍政権の政治は、それにとどまらず、問題はそのもとにまで及ぶ。この政権は、これまで不都合な文書や記録、証拠、事実を隠蔽してきたが、今回もまた隠蔽の手法で責任の追及をかわそうとしている。それが強く露つたのは、民主主義を成り立たせるための制度である。

アカウンタビライティー（説明責任）は、政権を巡る「説明責任」に受ける可能性にさらされたものである。国会における議員の職務がその柱だが、説明責任

まや政治史上最大となったのは、安倍は、在野との関係から「抵抗」を受ける可能性「を」一掃し、官邸組織からも官邸制なるもの（合理性を無視）、「代議」を崩している。この問題については野党が本陣を入れているのが、この点の救いである。

歴史的に知らぬなら、アカウンタビライティーは、「腐敗の腐敗」に際して開かれ、収められた腐敗の成果である。権威や腐敗の公敵があつてはじめて統治は腐敗がないかを市民もチェックできるからである。コントロールを受けざるをえない。右時に世（公的支配）を許さないことが、その目的である。この民主制の制度を一貫して「腐敗」に際しては、自らに「腐敗」を許さなければならぬ。自らに「腐敗」を許さなければならぬ。自らに「腐敗」を許さなければならぬ。

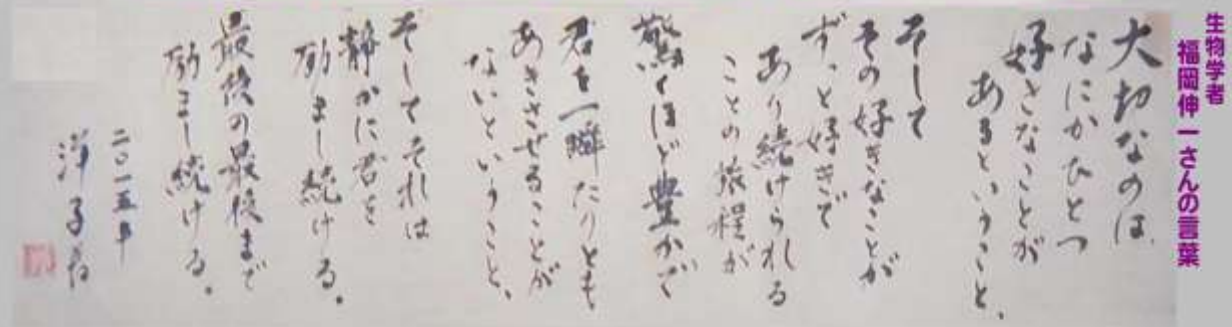


（早稲田大学教授）齋藤純一

朝日新聞 2019.12.4. 齋藤純一さん寄稿 「桜を見る会 危うい選挙独裁」

◆拡大記事 URL: <https://www.infokkna.com/ironroad/2019htm/191204sakuranokai.jpg>

孤独な小学生から中学・高校進学までの7年間好きなことに向き合う自分を自学ノートに綴り、こころの通いあえる人たちとの交流をつづった番組
 NHKの番組「ぼくの自学ノート 7年間の小さな大冒険」で語られた 福岡伸一著「エリボシカミキリ」にある心に響く言葉



NHK 「ボクの実学ノート 7年間の小さな大冒険」で語られた 生物学者福岡伸一さんの言葉 福岡伸一著「エリボシカミキリ」より

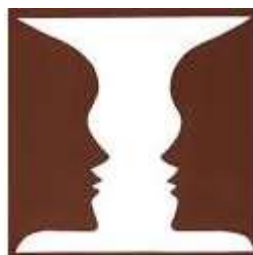
<https://www.infokkna.com/ironroad/2019htm/1912jigakunote.jpg>



<https://www.infokkna.com/ironroad/2019htm/1912yoshino.jpg>

- ◆ 金子書房 「ソーシャル・マジョリティ研究 -コミュニケーション学の共同創造-」
 発達障害者の側から ソーシャル・マジョリティ(社会的多数派)のルールやコミュニケーションを研究しました。
 「障害は個人の中にあるのではなく、多数派が作った社会と少数派の身体特性の間に生じる」
 なにかよくわからぬまま発達障害者とかたづけられ、排除される人が多数いる
 その人たちは社会的多数派のルールやコミュニケーションについてゆけないだけである。
 逆に社会多数派があまり意識していないが、社会的多数派のルールやコミュニケーションが多数あることを理解し、そんなルールなどを障害者側に立って研究することで理解が深まれば、
 お互いのコミュニケーションを生むことが出来て、より良い関係を生むことが出来る。

だまし絵 真実は一つなのか…… 多数派のおごり by Mutsu Nakanishi



絵の中にだまし絵という世界がある。
 このだまし絵 人のその時々感情・事情によって見え方が違う。
 今 画一的になんでもかんでも AI に任せて判断させようとする。
 知能ロボット万能論が伝えられている。
 でも この知能ロボットにだまし絵を見せて アクションを起こさせたら、どんな反応をするのか???

興味津 AIの判断万能を唱えるのは間違いではないか……

上記したソーシャル・マジョリティ研究の理解にも このだまし絵の理解が欠くことが出来ないと思っている。
 そもそも 現世人類が幾多の困難を乗り越え、
 生き抜いてきた所以は相手の表情で共感・感応を醸成してきたからに他ならない。